

夢の人

大村伸一

この話は私の古い友人から聞いた。そんな話があるとは思わなかったが、まったくないとも言い切れない。彼がいつになく真面目だったので、かえって信じなかったのだろう。彼がどこかで聞いた話をさも自分の体験のように話ただけなのかもしれない。そう疑って、こんな話を書きそうな作家を何人か調べてみたが、それらしい小説を見つける事はできなかった。空想なら空想でもいいと思い、私はこの話を書いておくことにした。

彼は、ある日ふと、夢でいつも同じ女性に会っていることに気づいた。見る夢は違っていても、そこで出会う誰かを、夢の中では少しも気づかないのだが、目覚めた後で思い出し、またあの女だと分かるのだと言う。現実に出会ったことのある誰かではなかったらしく、女に似た雰囲気を持つ人物は思い当たらなかった。忘れていただけかと思い、古いアルバムを眺めてみても、これだという人物は見つからなかった。不思議に思い調べるうちに、アニマという言葉を知って、自分の中の理想の女性像なのかと思うようになった。

夢にいつもその女が出てくるのに気づいてから一年ほど経っても、女の顔や体つきを細部まで思い出せるわけではなかった。それはやはり夢の中の登場人物だからなのだろう。ただ、その女の一瞬見せる仕草や口調、考え方、そういった断片を現実の誰かの中に見いだす事はあった。たとえば、一度、地下鉄の駅で前を歩く女性から漂ってきた香水のかおりが、夢の女のものと同じだと気づいた。そのとたん、その女性がどんな顔をしているのかを確かめずにいられなくなり前にまわって顔を覗きこみさえた。それでその女性には怪訝な顔で見られてしまったが、勿論、そのかおり以外に夢の女と一致するものはなく、それから数日の間、理由もない失望から彼は逃れられなかった。案外、何処かで毎日すれ違っている、いろいろな人物の印象の集合体が、夢の中であの女を形作っているのではないだろうか。彼はそんなふうに思うようになっていった。

夢の中の女を自分の心の生み出したものだと言い聞かせそう考えることに慣れた頃、彼は東欧の小さな町に仕事で行くことになった。飛行機を幾度も乗り継ぎ、出発して二十四時間が過ぎても目的地にはたどり着かなかった。乗り継ぎのために待ち合わせる施設は次第に貧相になってゆき、そのうち車よりも小さな飛行機に乗せられるのではないか、おそらく行き先

は地上ではなく月面にあるのではないかと疑い始めた頃に、ようやく目的の空港に着いた。空港を出ればあたりは雪で覆われていて、確かにここが月なのだと彼は信じそうになった。しかし勿論そんなことはなく、空港から三十分程鉄道に乗って商談相手のいる町にたどり着く。その町は小さかったが、住民の人恋しさは人口に反比例するというエッカーの法則の例外ではなく、仕事の後で招待された店は扉の中の小さい空間に驚くほど大勢の客が詰め込まれていた。隣の男の肘に突つかれながら飲むアルコールはあまり効かなかったがそれはすでに酔っぱらっていたからなのかもしれない。その町の酒は寒い国の例にもれず強いものばかりだった。店に流れる音楽はその土地の古い曲らしく、彼の故郷では聞いた事がなかった。彼はその曲が気に入って誰が歌っているのかと店を見回した。そして、彼は夢の女を発見する。

それが夢の女であることは一目で明らかだった。思わずじっと見つめていると、相手も彼の視線に気づき、見返してきた。そして、その女性の顔に浮かんだ表情は、たとえその店が月にあったとしても、驚きの表情であることに間違いはなかった。夢の中でしか会った事のない女が自分に気づくはずがないと理性では分かっているが、彼は彼女もまた自分のことを知っているのだと悟った。

あの女だと確信はしたが、その顔や体つきは夢に見るたびにおそらく変わっていたはずだから、その確信が何を根拠にしているのかはまったく分からない。一年以上も夢で見続けていたから分かったのだとしか言いようが無い。それでも、偶然のように訪れた町で、実在するはずのない人間に出会うことなど、現実にはあり得なかった。しかし、どれだけ否定しても、目の前にその不可能が存在した。

彼はまるで夢の中にいるように他のことをすべて忘れてその女性に近づいていった。他の客が彼の前にいたが、彼が近づくと身体をどけて彼を通してくれた。彼がじっと見つめている女性は、土地の人たちとは違う服装をしていた。後で話を聞いて分かる事だが、彼女もまた遠い国から来た旅行者で、長距離バスが故障したために偶然、観光地でもないこの町に一泊することになったのだという。

彼が、これは信じられないかもしれないけれど前置きをして、一年以上も前から、自分の夢の中であなたに会っていたのだと打ち明けると、彼女もまた信じられないだろうけれど同じ前置きをして、一年以上も前から、わたしの夢の中であなたに会っていたのだと話した。どんな夢なのかはほとんど思い出せなかったが、幾つか覚えていた夢のことを話すと、彼女はそのことを思い出したし、彼女の夢の話を知ると、忘れていた夢だったが、彼はそれをはっき

りと思い出すことができた。

「そんなことがあるものですか」

ひとしきり夢の話をしたあとで、二人は同時にこの言葉を言った。そう言ってから、彼は目の前の女性が本当はそこにいない幻覚なのではないかと疑い、確かめるために右手を伸ばして触れようとしてみた。本当に幻覚であるならば、触覚さえも幻に置き換えられてしまうかもしれないが、それでも手で確かめたいと思ったのだ。彼女もまた同じように考えたのだろう、右手を差し出し彼に触れようとした。そして、お互いの指が相手の頬に触れた。

最初、これは友人から聞いた話だと書いたが、こんなことまで知っているのは、その女性に会ったときその事を知らせるため彼から送られてきたメールを私はまだ保存していて、いつでもそれを確かめることができるからだ。相手に触ってみる決意をしたメールも私は受け取っている。ただ、そうして二人がお互いに触れた後、彼からの連絡は一切途絶え、行方が分からなくなってしまった。

田舎のバーで会ったという女性は彼の妄想なのに違いない。相手がその話に調子を合わせて、彼をうまくまるめこんでしまったのだろう。彼は詐欺か何かの犯罪に巻き込まれ、もう死んでしまっているのかもしれない。私はそう思っていた。夢の中の女に現実で会おうなどありえないことだから、唯一の説明はそれしかないと思っていた。それで、真実を確かめるために私は彼の失踪した町に向かった。彼と同じように飛行機を幾度も乗り継ぎ、彼と同じように出発して二十四時間が過ぎても目的地にはたどり着かなかった。乗り継ぎのために待ち合わせる施設は確かに次第に貧相になってゆき、そのうち車よりも小さな飛行機に乗せられるのではないかと、おそらく行き先は地上ではなく月面にあるのではないかと疑わざるを得なかった。だがやがてその旅も終わり、ようやくその空港に着いた。空港を出るとあたりは雪で覆われていて、確かにここが月なのだと思いは信じそうになる。だが勿論そんなことはなく、空港から三十分程鉄道に乗って彼の失踪した町にたどり着く。

もしかすると、その女性こそが実在しており、彼のほうが彼女の夢の中の存在だったという可能性もなくはない。だから、彼女に出会ってしまったが故に彼はその存在を失ったのだと考えれば、彼の失踪についても筋が通るだろう。ただ、その場合は、私が彼のことを古くからの友人であるなどと考えている理由がわからない。他の誰かの夢の中の人物と知り合うことなどあり得ないではないか。彼の消息を確かめるために、彼が失踪したその町に降り立った

私は、彼が最後に話をしたその女性と話をしなければと思った。

彼が最後に訪れた店はなかなか見つからなかった。それでも白夜の季節で時間はたっぷりあったから、三日目の夜には私はあの店のドアを開いていた。そして、彼が最後に話をしたあの女性までをも、私は探し当ててしまった。彼女は、旅行の帰りにまた長距離バスが故障し、観光地でもないこの町にもう一度、偶然に一泊することになったのだという。

彼からのメールでは分からなかったが、彼女の印象はとても薄くて、彼が一目で彼女に気付いたという話は信じられなかった。私のように、あらかじめどうしても話をしたいと覚悟を決めていなければ、そこに座っていることにさえ気づかないだろう。現に、店の主人は一時間以上も前から店にいたその女性の注文を聞いていなかった。彼女の目の前に座り、改めて彼女の顔をじっくりと見直してさえ、彼女がどんな女性であるのかを言葉にすることは難しかった。

そして気づいたのだが、印象の薄いその女性を私はもう何年も前から夢の中で知っていた。私の夢の中の女は目の前にいるこの女と姿形は少しも似ていなかった。それでも、私には二人が同一の存在であることを確信した。友人もまた、一目でこの確信を得たのだろう。それは、友人と私が同じ夢を見ていたことを意味するのだろうか。それとも、人の見る夢を操る、危険な詐欺組織があるのだろうか。そんな疑問が頭に浮かんだが、目の前に彼女が存在するという明らかな事実の前に、疑問はすぐに消えてしまった。

それから私は、彼女が幻ではないことを確かめるために、あるいは、幻であることを確かめるために、テーブル越しに手を伸ばしその頬に指を触れようとした。初対面で失礼を非難されるかと思ったが、確かめずにはいられなかった。彼女は拒否することもなく私の指を待ち受けるかのように、そして私の目をじっとみつめていた。やがて指が触れた瞬間、私は現実が何なのか分からなくなった。今まであれほど印象が薄く、集中していなければ彼女がそこにいることさえ忘れてしまいそうだったのに、指が触れた瞬間彼女の輪郭がくっきりと背景から浮き上がり、その卵形の顔の輪郭やその中にバランスよく配置された顔の造形が、急に光を当てたかのように鮮明に見えるようになった。彼女は夢ではなかった。あるいは彼女は夢から現実になった。

彼女が私の夢の幻ではないことは間違いがなかった。彼女のうかべた微笑みは、私のほうが彼女の夢の中の存在でしかないと告げているようだった。だが、私が私であるという確信は消す事などできない。私は自分が他人の夢の中の存在だなどと想像さえできなかった。それ

でも、彼女は確かに私を夢に見ていた。私は彼女の夢の中の人物としてだけ存在する。彼女が目前のグラスを手にとり一口飲むと、やがて酔いに頬が赤く染まる。彼女の心が夢の中の存在から、酔いによって意識を逸らされるとき、私は自分の存在が少しだけ薄れたことに気づいた。私は彼女の夢の中で生み出された。彼女が目覚めれば私は消えてしまうのだろう。

そう思ったとき、彼女は私の考えを直接聞いたかのように首を横に振った。そして私に顔を近づけ私の耳にささやくように言った。彼女もまた私と私の友人の夢の中にだけ存在する存在なのだ。私と友人が夢を見なければ存在することのなかった幻なのだ。そう告白した。